

河井寛次郎の制作論的思索

—制作における「背後のもの」をめぐって—

浪
波
利
奈

要旨

本論文では、制作を担う根源的存在者をめぐる陶藝家・河井寛次郎(一八九〇年～一九六六年)の初期・中期の思索を主に辿り、それにより形成された彼独自の制作態度を明らかにする。

第一章において、初期(～一九二八年頃)の河井が作陶態度を改めた経緯を概観しながら、彼の制作思想の基盤となるものを探る。一九二一年、工藝における個人作家としてデビューした彼は、作者の技巧や作意を以て作品上に美を作り上げる「創作」という制作姿勢を自省した。その契機となったのが、工人の作る実用雑器であり、後に謂う「民藝(民衆の工藝)」であった。(自我)に囚われない工人の制作では、(形が自ずから形作るはたらき)、換言すれば(制作における自然)という形成作用が生じ、形の生成を以て(作者の個差を超えた普遍的な美)が実現される。河井はこの高次の美へと至るために「自然に帰る」すなわち「創作」を超えて(制作と自然との渾然一体)にまで自らの制作を深化させることを願った。作者が自己本位に陥らずに然るべき制作をなすには、作者自身が(美への意識の志向性)を改めなければならない。この認識に至って彼は、民藝運動への参与を経て、主観的な美的理念を志向しない制作へと舵を切った。

中期(一九二九年～一九四八年頃)、制作論的思索を通じて河井は、「背後のもの」が作品上に活き活きと現れている現実こそが美に外ならず、人は「背後のもの」の現れを美しいと感ずるのだと看破した。「背後のもの」は彼の文筆作品において多くの名を持つが、本論文では「X」という名を便宜的に与える。第二章では、一九三〇年代から一九四〇年代に書かれた随筆、自筆日誌、詞句集等を総合的に捉え直し、「X」をめぐる制作論的思索の一端を考察する。工藝の美術化という時流に伴い河井は、個人作家が「X」を失いつつあることに着目し、それを如何にして回復するか問うようになった。彼は一九三四年、藁細工師や陶工の手仕事に、民族や伝統を通じて継承されてきた原初的な造形力「からだ」を見出した。また一九三六年、版画家・棟方志功(一九〇三年～一九七五年)の作画を手掛かりに、制作において作者が(自我)を棄て、意識を超えた内なる「本来のもの」が働く境地にまで達しなければならないことを洞察した。そして一九四四年、彼は美しい集落において働く「大きな設計者」という形成的存在者を把握したことで、(自我)を超えた自他不二の根源的存在者(自分)に対する観念を得た。(自分)とは形成的な自己直観のはたらきそのものであり、この(自分)にまで「自覚」が深化されることによって(自我)は自ずから超克される。高次の制作境地を

担う存在、これをめぐる考察を通じて、制作をその奥底で統べるはたらき、「X」を彼は自覚するに至った。

第三章ではこれまでの論考に基づき、河井の制作論的思索が如何にして後期（一九四九年～一九六六年）の造形活動へと具現したかを確認し、彼の制作と思索とが有している真価を提起する。制作における「X」は、仕事に仕事をさせる窮極のはたらきであり、主体としての制作者と客体としての素材を包越する形成作用である。制作上で「X」が活き活きと働き、〈制作と自然との渾然一体〉にまで制作が深化されると、生成未然の形象が形成を以て実現する。このような「X」のはたらきを自覚した河井は、後期、制作において〈自我〉を棄てることで「X」へと帰すという制作態度を執った。これは「自然に帰る」と彼が宣言して以来、終始一貫した制作態度であった。美を生み出す、もしくは美として自らを表現する根源的存在者、その直観こそが彼の営為全般の出発点であり、終着点である。この意味で河井は、人間の「背後のもの」を思惟し表現し続けた個人作家であった。